

第7次大津町振興総合計画 (素案)

令和8年（2026年）4月

町長挨拶

目次

序論	11
第 1 章 振興総合計画の策定にあたって	22
1. 計画策定の背景	22
2. 計画の構成	43
第 2 章 大津町の現況と課題	65
1. 人口減少・少子高齢化への対応	65
2. 産業の活性化	76
3. 快適な生活環境の整備	87
4. 地域ごとの特性への対応	109
5. 持続可能な社会の実現	1110
第 3 章 まちづくりの前提条件	1211
1. まちの将来フレーム（人口フレーム）	1211
2. 財政の見通し	1514
基本構想	1615
第 1 章 基本構想	1716
1. 大津町の将来ビジョンと取り組み姿勢	1716
第 2 章 施策の大綱（政策分野別方針）	1918
1. 施策の大綱の体系	1918
2. 政策分野別基本方針	2019

序論

第 1 章 振興総合計画の策定にあたって

1. 計画策定の背景

◆ 大津町振興総合計画とは

大津町振興総合計画は、大津町まちづくり基本条例第 14 条 総合計画を根拠として策定される、町政運営の総合的な指針であり、と位置付けられる本町のまちづくりの最上位計画として位置づけられるものであり、本計画は、大津町の将来ビジョンの実現に向けて、同条例の理念や同条例に定められる「住民自治の原則」、「情報共有の原則」、「参画の原則」及び「協働の原則」のまちづくりの基本原則に基づいて政策・施策等を推進するためのにあつての羅針盤となるものです。

◆ 第 7 次大津町振興総合計画の策定の趣旨

本町は、周辺自治体への先端半導体企業の進出や、阿蘇くまもと空港アクセス鉄道計画の肥後大津ルート決定を受け受け、町の抱える課題や必要とする施策も大きく変化しています。そのため、本町の最上位計画となる第 7 次大津町振興総合計画（以下「本計画」という。）はこれまで以上より一層に、各個別計画や重点的な施策との連動性制のあるビジョンが求められることから、時期的に連続し、内容的に相互に補完し合あう、地方版総合戦略である「大津町デジタル田園都市構想まち・ひと・しごと創生総合戦略（以下「本戦略」という。）」を一体的に策定しました。

人や地域資源を大切にする環境を整え、町民同士だけではなく、町外の人や、町内外の組織や団体等がつながることで、それぞれの力を発揮し、地域一体となって地域の良さを高めるまちを目指します。また、時代の変化に対応し、効率的かつ効果的な行政運営・町民サービスの提供を進め、全てすべての人にとって安心して住みやすいまちを築いていきます。

◆ 第 7 次大津町振興総合計画の策定にあたっての基本理念

① 大津町まちづくり基本条例に基づく理念の実現

大津町まちづくり基本条例は、これからの大津町が目指す姿やそれを達成するための基本理念とその仕組み、住民参画のルールや町の仕事の進め方など等の、まちづくりの基本的事項を定めた、町民、議会、行政が共有する基本ルールです。第 7 次大津町振興総合計画においても、大津町まちづくり基本条例に定める理念を踏まえ、町民や各種団体、事業者と行政とが力を合わせてまちづくりを進めることにより、人と自然と産業が調和した「誰もが住みよく誇りのもてる町 おおづ」の実現を目指していかなければなりません。そのため、多くの方の声をもとに描いた目指す姿を共有し、その実現に向けて取り組む指針を示すものとして、本計画を策定します。

② 継承と発展のまちづくり

大津町は、豊かな自然、人の英知、恵まれた交通の要所、長い歴史や文化など等の、数々の「宝の山」を育んできました。

これまでこの「宝の山」を活用し、持続的な大津町の発展を実現してきましたが、これらは未来にわたってもまちづくりの貴重な礎となっていきます。この「宝の山」を活用するだけでなく、まちづくりの礎としてより強固なものとした上

で、大津町の将来を担（にな）うこども子どもたちを始めとする未来の世代へ着実に継承していきます。

また、これからも大津町が持続的に発展していくためには、これまでのまちづくりの礎を継承するだけでなく、大津町を取り巻く環境の変化を踏まえて各種施策を発展させていくことも必要となります。例えば、これまで「農工商併進の活力あるまちづくり」を町政の基調として、継続的に施策を展開し、企業の維持・誘致、産業振興により、豊かで活力あるまちづくりを進めてきましたが、今後、阿蘇くまもと空港アクセス鉄道の整備による交通ネットワークの利便性向上や半導体産業の急速な成長^{など等}の大津町を取り巻く環境の変化が想定されることから、こうした変化を好機と捉えながら、これまでの施策を磨き上げ、発展させていきます。

2. 計画の構成

大津町の将来ビジョンの実現に向けて、大津町まちづくり基本条例の理念や同条例に定められる「住民自治の原則」、「情報共有の原則」、「参画の原則」及び「協働の原則」のまちづくりの基本原則といった全ての政策・施策等に共通する考え方を確実かつ的確に反映するため、「基本構想」、「基本計画」及び「実施計画」により、構造的に本計画の内容を整理します。

◆ 基本構想

大津町をどんなまちにするのかといった、将来の大津町の姿、それを実現するためのまちづくりの方向性を示しています。

計画期間は令和8年度（2026年度）から令和15年度（2033年度）までの8年間です。

◆ 基本計画

基本構想で示された将来の大津町の姿を実現するため、様々な分野において、町で取り組むべき内容を示しています。計画期間全体の8年間を前期4年間と後期4年間に分け、進み具合や課題を確かめて、次の4年間の基本計画を策定します。

前期計画期間は令和8年度（2026年度）から令和11年度（2029年度）までの4年間です。

◆ 実施計画

基本計画に示された様々な分野での取組を進めるために必要な具体的な事業を示しています。3年間の事業費を含む事業計画を示し、必要に応じ修正を加えながら毎年度策定します。

計画期間は令和8年度（2026年度）を初年度とした3年間で、毎年度ローリング方式により見直しを行います。

（参考）大津町まちづくり基本条例（抄）

大津町は、江戸時代から宿場町として栄え、先人たちの努力と、町を愛する多くの人々の英知により発展してきました。

私たちは、いにしえより先人たちが守り続けてきた、この美しく豊かな自然、培われてきた文化、起こし育ててきた産業や伝統、助け合いの精神を守り育て、将来へ引き継いでいかなければなりません。

これらを礎としながら、次代を担う子どもたちを育み、すべての人権が尊重され、安心して暮らせる豊かなまちづくりに取り組んでいきます。

私たちは、町民と町が一体となつてともに考え、役割を分担し、責任をもってまちづくりを進めることにより、人と自然と産業が調和した「誰もが住みよく誇りのもてる町 おおづ」の実現を目指します。

今、ここに、まちづくりの全般にわたる指針として、基本となる理念や原則を定めた、すべての大津町民に共有され遵守される最高規範として、この条例を制定します。

（まちづくりの基本原則）

第 4 条 町民及び町は、次に掲げる基本原則に基づいて、協働してまちづくりを推進するものとします。

- （１）住民自治の原則 まちづくりは、町民自らが、家庭、職場及び地域社会の中で、住民自治を担う一員として公共の利益のために自らできることを考え行動するものとします。
- （２）情報共有の原則 まちづくりは、町民と町がともに一体となって、まちづくりに関する情報を共有して行うものとします。
- （３）参画の原則 まちづくりは、男女が共にその個性と能力を発揮し、町民の意思を反映させるため、町民の参画を得ながら行うものとします。
- （４）協働の原則 まちづくりは、町民と町がそれぞれの責任と役割分担を認識し、相互理解と信頼関係を深めながら協働することにより行うものとします。

（総合計画）

第 14 条 まちづくりを総合的かつ計画的に進めていくための総合計画は、この条例の理念に従い策定されるとともに、新たなニーズに対応できるよう不断の検討を加え、必要な見直しを行わなければなりません。

- 2 町の執行機関は、総合計画の策定に当たっては、町民の意見が反映できるように、広く町民の参画を得て策定しなければなりません。

第2章 大津町の現況と課題

1. 人口減少・少子高齢化への対応

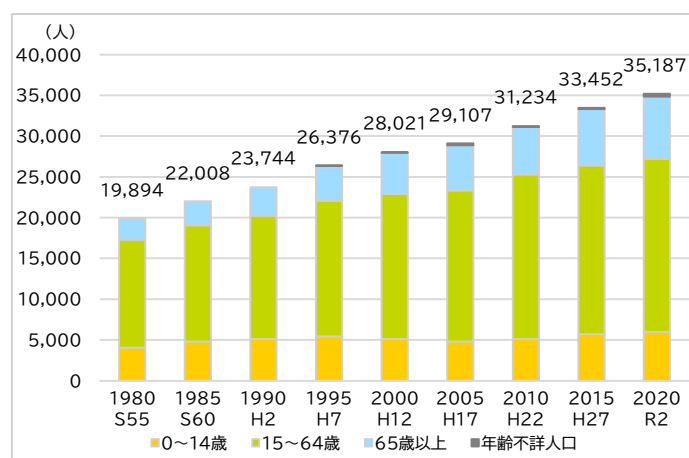
<現況>

- ◆ 大津町の人口は一貫して増加傾向にあり、全国的な人口減少傾向を踏まえると特徴的であるといえますが、65歳以上人口は年々大きく増加しており、少子高齢化が徐々に加速してきていると考えられます。
- ◆ 直近の自然増減数・社会増減数の推移をみると、令和4年（2022年）以降は死亡数が出生数を上回る自然減となり、令和5年（2023年）には人口増加数がマイナスとなるなど、大津町の人口動態は大きく変化してきています。
- ◆ 社会増減数は令和5年（2023年）に大幅な減少となっており、町内の土地価格の高騰や町と町周辺の市町村間の交通の利便性が高まったことで、町内ではなく、町周辺の市町村への居住を望む人が増えていることが要因となっていると考えられます。町民アンケートにおいても、土地価格の高騰やそれに伴う家賃の高騰により、大津町への居住意向や大津町での居住環境に影響が生じているとの意見が挙げられています。
- ◆ 外国人人口については、令和3年（2021年）以降、急激に増加しており、令和5年（2023年）は大津町の総人口の2%以上が外国人人口となっており、国籍別の人口構成にも変化が生じています。

<課題>

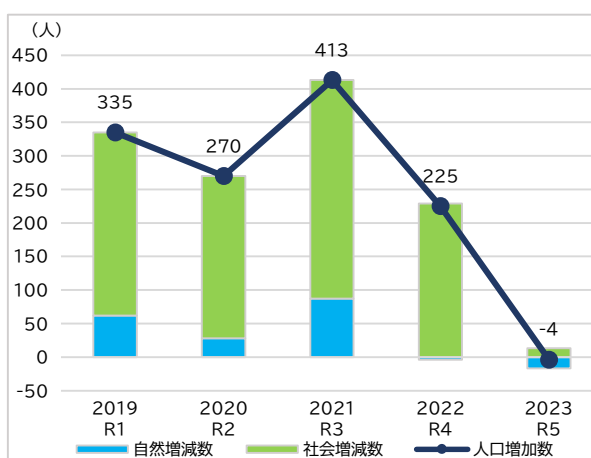
人口減少・少子高齢化は、大津町における経済縮小、町民の生活利便性の低下、地域コミュニティの衰退などの一様な課題を引き起こすことが想定され、今後の大津町の活力低下が懸念されます。こうした課題に対応するため、若年層を中心に、大津町に住みたい、住み続けたいと思うことのできるまちづくりを進めるとともに、誰もが健康に、安心して生きがいをもって暮らせる環境を整備する必要があります。また、今後も外国人人口の増加傾向が継続することが予想されることから、誰もがが暮らしやすい地域共生社会の実現に取り組む必要があります。

□大津町の人口推移



出典：総務省「国勢調査」

□大津町の自然増減・社会増減の推移



出典：総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」

2. 産業の活性化

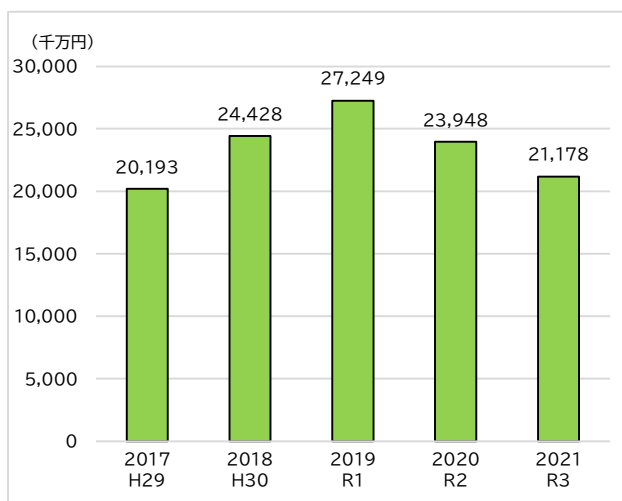
<現況>

- ◆ 大津町の製造品出荷額等は令和元年（2019 年）まで増加し、その後令和 3 年（2021 年）にかけては減少傾向となっていますが、今後の半導体関連企業の集積や工業団地の整備等により、さらなる産業の発展が期待されます。
- ◆ 大津町の農業産出額は令和 5 年（2023 年）にかけて一貫して増加傾向にあり、特に野菜の産出額が増加しています。近年の農地の集積化に加え、畜産系のクラスター事業化による生産効率の向上等により、農産物、畜産業の生産額が増加していると考えられます。
- ◆ 観光分野に関しては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で全国的に観光客が減少し、その後回復傾向にはあるものの、大津町の観光情報動画・SNS アクセス数は令和 4 年度（2022 年度）から令和 5 年度（2023 年度）にかけて減少しており、観光地としての情報発信が十分にできていないと考えられます。

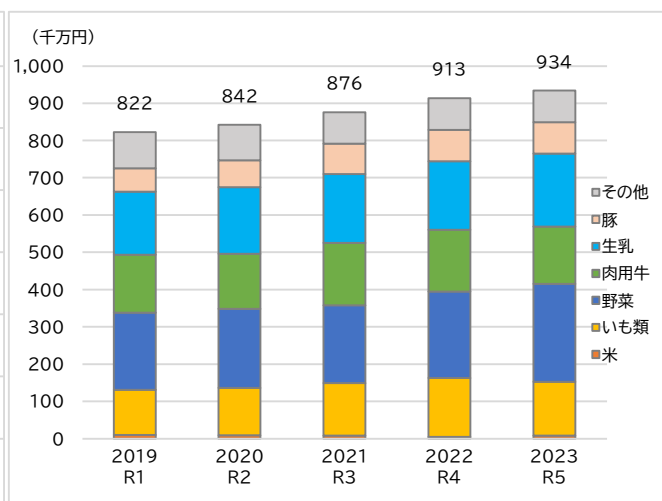
<課題>

生産年齢人口の減少により全国的な経済規模の縮小傾向にある中、大津町では半導体関連企業をはじめとした企業誘致が進んでおり、今後はさらなる産業基盤の強化や雇用環境・受け入れ態勢の整備に取り組む必要があります。農業に関しては、引き続き生産性の向上に努め、製造業・農業両面からの産業活性化を目指した取組が重要となります。観光面に関してはコロナ禍からの回復とともに、より魅力的な観光地としてのプロモーションを進め、効果的な情報発信による観光産業の強化に取り組む必要があります。

□大津町の製造品出荷額等の推移



□大津町の農業産出額の推移



出典：経済産業省「工業統計調査」、総務省・経済産業省「経済センサス-活動調査」 出典：農林水産省「市町村別農業産出額（推計）」

3. 快適な生活環境の整備

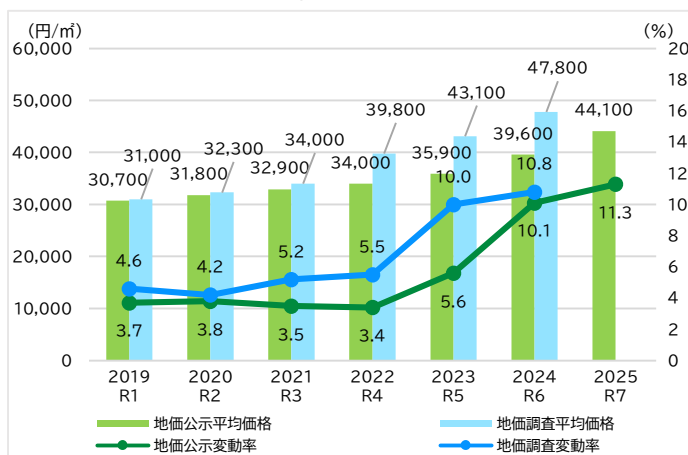
<現況>

- ◆ 大津町の住宅土地平均価格は一貫して上昇しており、毎年 1 月 1 日に国土交通省が公表する地価公示では、[令和 7 年（2025 年）](#)に 1 平方メートル当たり 4 万円を上回り、毎年 7 月 1 日に都道府県知事が価格判定する地価調査においても、[令和 5 年（2023 年）](#)に 1 平方メートル当たり 4 万円を上回る水準となっています。[令和 5 年（2023 年）](#)以降の変動率の増加幅が大きく、地価公示及び地価調査のいずれにおいても、[令和 6 年（2024 年）](#)の変動率は 10%を上回っています。
- ◆ 近年、環境問題に対する取組の重要性が高まっており、大津町においてもごみの減量化・リサイクルに注力しています。ごみ総排出量は[令和 2 年（2020 年）](#)以降順調に減少傾向にある一方で、リサイクル率については[令和 5 年（2023 年）](#)に減少し、[令和元年（2019 年）](#)の水準を下回る結果となっています。
- ◆ 交通環境に関しては、町民アンケートでの道路網の充実に対する満足度が[令和 4 年度（2022 年度）](#)から[令和 5 年度（2023 年度）](#)にかけて減少したことに加えて、道路網の充実及び公共交通の充実は、町民にとって取組の重要度は高いものの、取組に対する町民の満足度は低く、取組の強化が必要となっています。乗合タクシーの利用者数についても[令和 4 年度（2022 年度）](#)から[令和 5 年度（2023 年度）](#)に約 900 人程度の減少となりました。
- ◆ 防犯・防災に関しても近年の犯罪巧妙化や自然災害の激甚化を踏まえ、町民アンケートでの交通安全・防犯対策の充実及び消防・防災の充実の重要度が[令和 2 年度（2020 年度）](#)から[令和 6 年度（2024 年度）](#)にかけて概ね増加傾向が継続しており、町民の取組への関心が高まりつつあります。

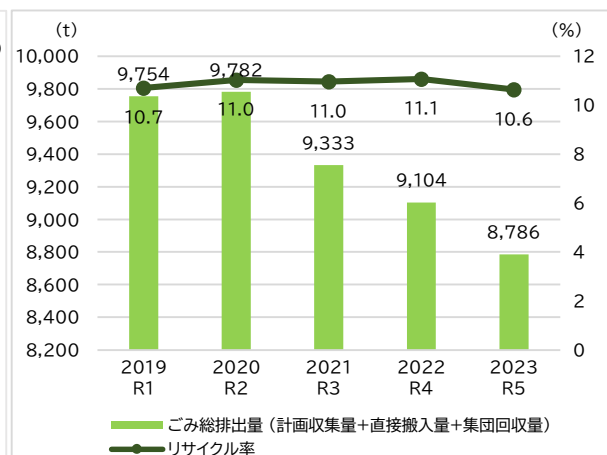
<課題>

土地価格が上昇する中においても、今後も多くの人到大津町に住みたい・住み続けたいと思ってもらえるまちづくりを目指すため、生活利便性の向上や住環境の整備に引き続き注力していく必要があります。環境負荷の軽減については、ごみの減量に継続的に取り組むとともに、今後はリサイクル率の向上に向けた施策を推進する必要があります。また、二酸化炭素排出量の削減に向けた自然環境の保護や循環型社会の形成にも注力することが重要です。道路網の充実及び公共交通の充実については、町民の取組に対する満足度を高めることができるよう、取組を強化していく必要があります。防犯・防災の体制強化も[安全で安心な生活環境の形成基盤整備](#)において重要な要素であり、大津町は、菊池圏域内では比較的空き家率が高く、今後空き家が増加することにより防犯面での影響が懸念されることから、空き家対策を進めるとともに、大津町全体で防災に向けた取組を進め、地域の防災力を向上する必要があります。

□大津町の住宅土地平均価格の推移



□大津町のごみ排出量・リサイクル率の推移



※地価調査は、各都道府県知事が毎年 7 月 1 日における基準地の 1 ㎡当たりの価格を調査し公表するものであり、令和 7 年度（2025 年度）の結果は公表されていない。

出典：国土交通省「地価公示」、「都道府県地価調査」

出典：環境省「一般廃棄物処理実態調査」

4. 地域ごとの特性への対応

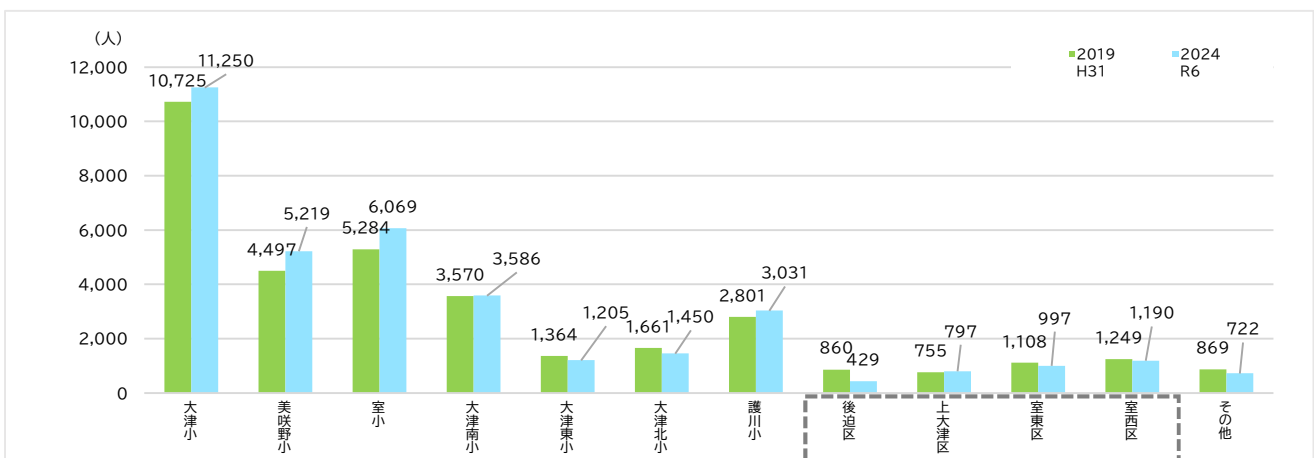
<現況>

- ◆ 大津町の人口を小学校区別にみると、令和元年（2019年）から令和6年（2024年）にかけて大津小学校区、美咲野小学校区、室小学校区など等の人口規模が比較的大きい校区では2019年から2024年にかけて人口が増加しているのに対し、大津東小学校区、大津北小学校区など等では5年間で人口減少となっており、町の中心地に人口が集まる傾向にあると考えられます。
- ◆ 人口が減少傾向にある地域では、人口が増加傾向にある地域と比較して速いスピードで少子高齢化が進展することにより、地域の産業や行政サービス、地域コミュニティ等の維持が難しくなることが考えられます。一方で、人口が増加傾向にある地域では、人口構造の変化に対して十分に行政サービスが対応できないことや転入者の増加により地域コミュニティの形成が困難になること等が考えられます。

<課題>

町にとっての全体最適な取組だけでなく、人口動態を始めとする地域ごとの特性を考慮した各地域にとって個別最適な取組も重要であり、両者の取組を車の両輪として進めていくことが必要です。また、各地域にとっての個別最適な取組を進めるにあたっての基盤として、地域コミュニティの形成・維持や地域間の連携促進は重要です。大津町のどの地域に住んでいても取り残されることなく、いつまでも安心して快適に住み続けられるよう、全ての政策分野を通じて取組を進めることが求められています。

□大津町の地区別人口の推移



※3月末の値で作成している。

※点線枠内、令和元年（2019年）と令和6年（2024年）のいずれかもしくは両方で小学校区をまたぐ行政区については別出しで表示している。

出典：大津町ホームページ

5. 持続可能な社会の実現

<現況>

- ◆ 大津町では、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」（平成 27 年（2015 年）9 月 25 日 第 70 回国連総会採択）及び「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」（平成 28 年（2016 年）12 月 22 日 SDGs 推進本部決定）を踏まえて、まちの持続可能な発展を実現するため、各政策・施策等と持続可能な開発目標（SDGs）17 のゴールの関連を整理して取組を推進してきました。
- ◆ 一方で、「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針改定版」（令和 5 年（2023 年）12 月 19 日一部改訂）においては、「気候変動や感染症をはじめとする地球規模課題の深刻化に加え、国際社会全体が SDGs 採択当時には想定されていなかった複合的危機に直面する中、令和 12 年（2030 年）までの SDGs 達成に向けた進捗は大きな困難に直面」していることが指摘されています。

<課題>

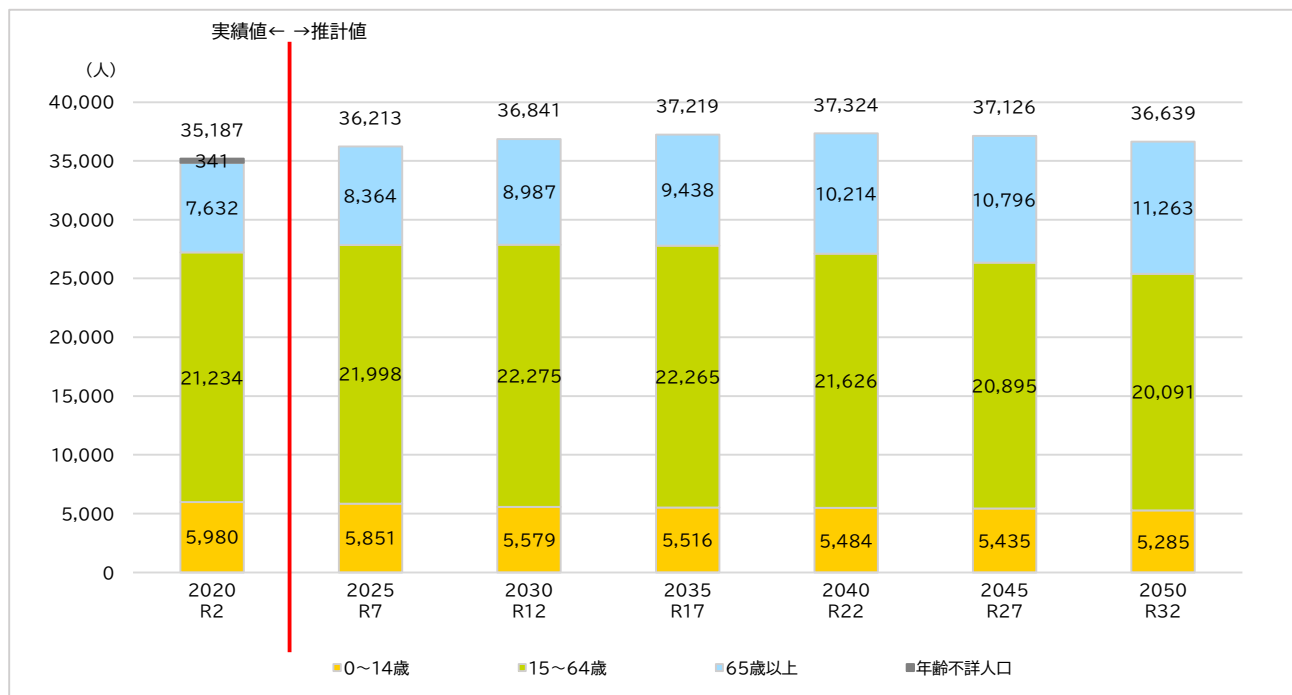
国際社会全体として、令和 12 年（2030 年）までの持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた進捗が大きな困難に直面している状況を踏まえ、大津町としては、これまでの取組を継続し、大津町に住みたい、住み続けたいと思うことのできるまちづくりを進めていきます。その中で、る中で各政策・施策等と持続可能な開発目標（SDGs）17 のゴールの関連も整理し、各種取組を推進する必要があります。また、行政だけでなく、まちづくりに関わる町民や各種団体、事業者を含む者の関係者一人一人が全員が、まちの持続可能な発展を実現するために「今、何に取り組んでいるのか」や「今後、何ができるのか」をと自ら考え、行動することができるよう、機運を醸成していくことが必要となります。

第3章 まちづくりの前提条件

1. まちの将来フレーム（人口フレーム）

◆ 国立社会保障・人口問題研究所による将来推計人口

国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）によると、大津町の人口は令和 22 年（2040 年）に約 37,000 人でピークに達し、その後は減少傾向となると推計されています。0～14 歳、15～64 歳人口は令和 12 年（2030 年）以降減少傾向が続く一方で、65 歳以上人口は一貫して増加傾向となっており、少子高齢化の急速な進展が予測されます。

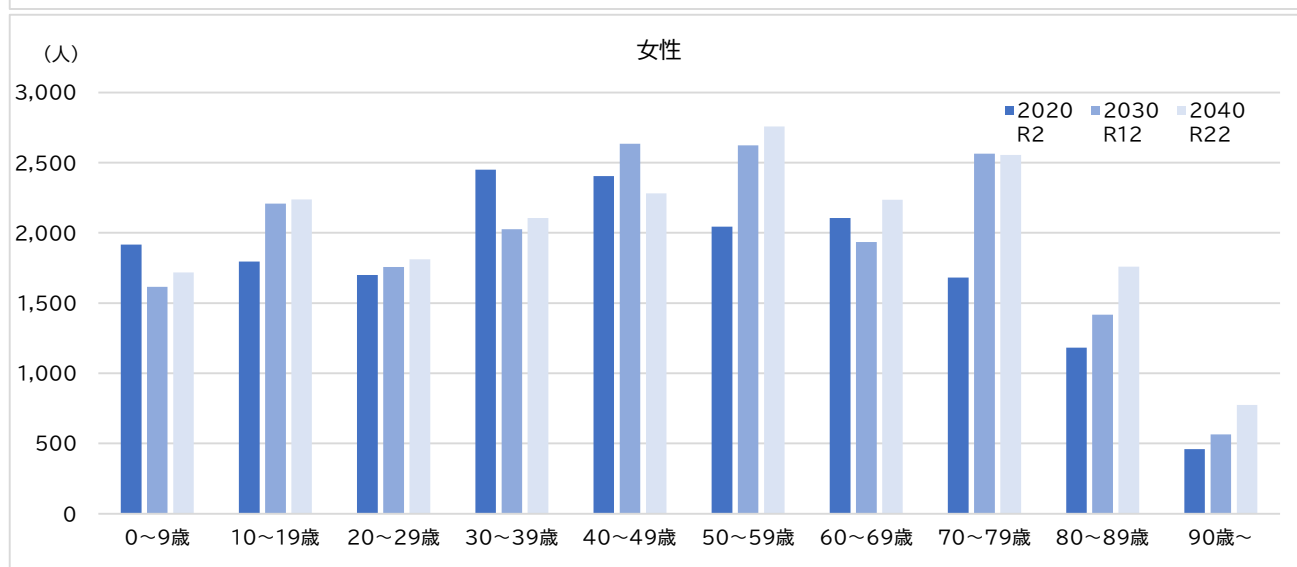
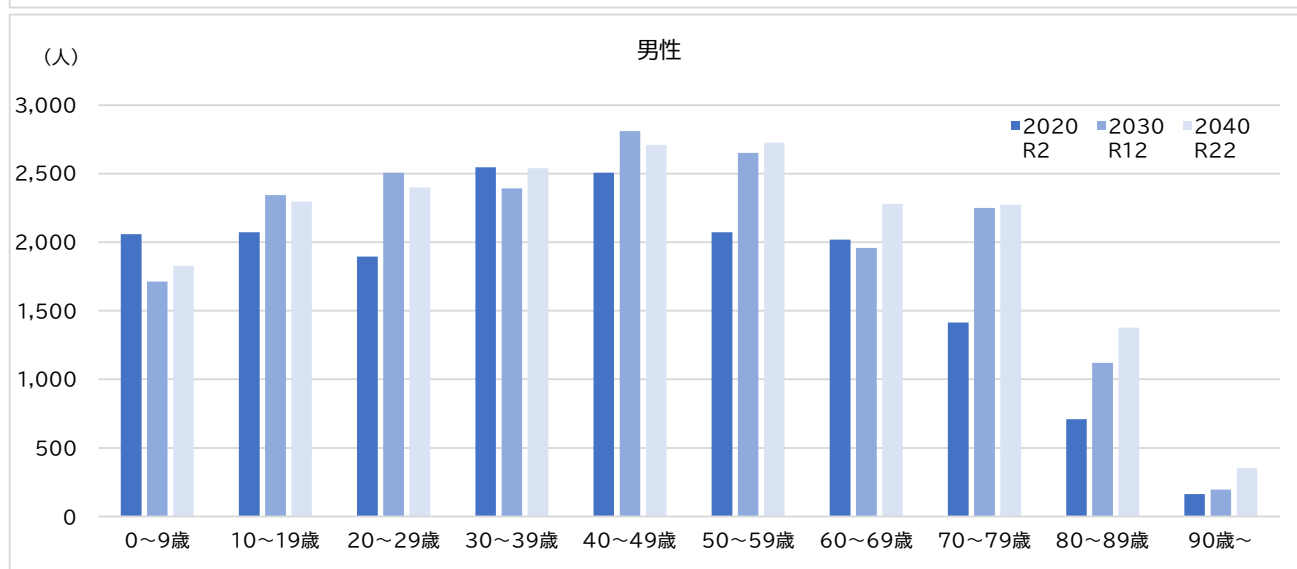
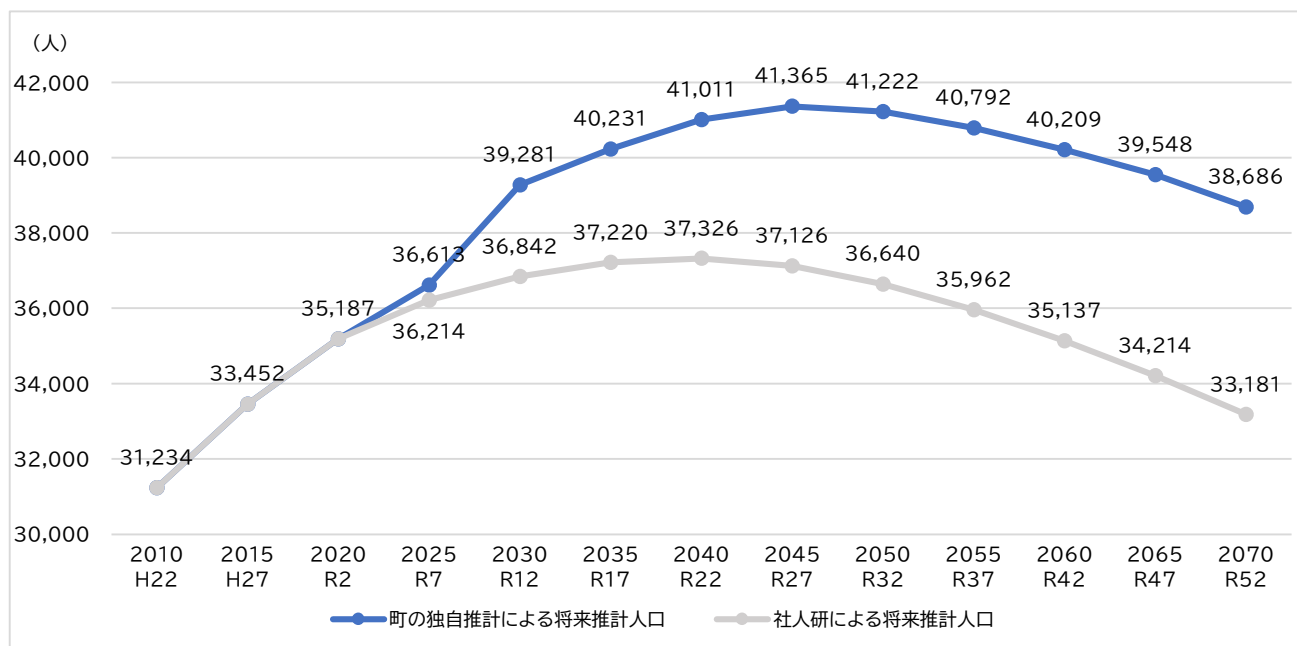


出典：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

◆ 町の独自推計による将来推計人口

社人研推計に町で仮定した条件を追加で設定し、将来人口の独自推計を行いました。結果、令和 27 年（2045 年）に約 41,365 人まで人口が増加する推計となり、令和 52 年（2070 年）時点では社人研推計を約 5,500 人上回る見込みとなりました。

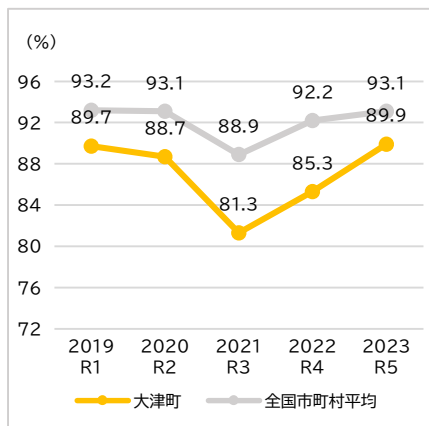
性別・年齢別の人口推移をみると、50 歳以下の年代では男女差が大きくなっていることがよみとれます。令和 2 年（2020 年）から令和 12 年（2030 年）では 20 代男性が大幅に増加する一方、30 代女性は大きく減少しており、令和 12 年（2030 年）から令和 22 年（2040 年）では 10～20 代女性が増加する一方、男性では減少となるなど、半導体関連企業集積に伴う従業者数とその家族を含めた 10～30 代の移動傾向は男女で異なっていると言えます。また、50 歳以上の年代では、男女ともに 50 代・70 代・80 代において令和 2 年（2020 年）から令和 12 年（2030 年）に大幅増加の見込みとなっており、令和 12 年（2030 年）から令和 22 年（2040 年）にかけては 60 代・80 代・90 代が大きく増加することから、より高齢化の進展が加速すると考えられます。



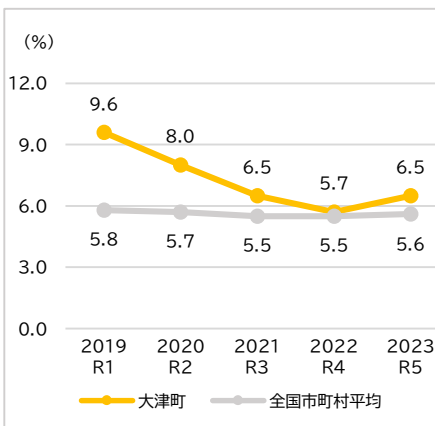
2. 財政の見通し

大津町の現在の財政状況をみると、経常収支比率は令和3年度（2021年度）以降上昇しているものの、全国市町村平均を下回る水準で推移しており、財政の硬直性は低いと考えられます。実質公債費比率に関しては令和4年度（2022年度）まで減少していましたが、令和5年度（2023年度）は増加しており、全国市町村平均よりも高い水準で推移しているため、引き続き持続可能な財政の実現に努める必要があります。財政力指数は全国市町村平均を大きく上回っており、財政力に喫緊で大きな課題はないと考えられます。

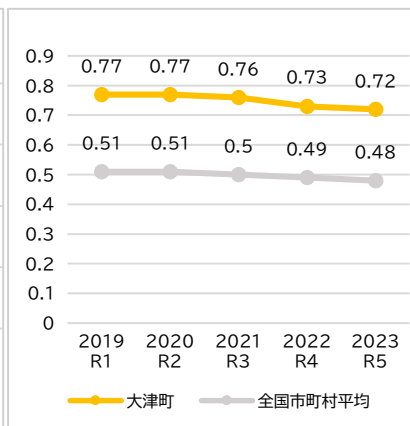
□ 経常収支比率の推移



□ 実質公債費比率の推移



□ 財政力指数の推移



出典：総務省「財政状況資料集」

一方で、今後は、加速する高齢化や公共施設の更新によって経常的経費や更新経費必要費用が増加し、財政上の負荷が高まると考えられます。高齢化や公共施設の老朽化による更新は近い将来起こり得ると考えられることから、政策分野横断的な視点から予算配分を行うとともに、本計画に基づく政策・施策等の成果や課題を検証し、効率的かつ効果的な行政運営に努めるなど等、持続可能な財政の実現に向けて、取組を進める必要があります。

基本構想

第 1 章 基本構想

1. 大津町の将来ビジョンと取り組み姿勢

大津町は、江戸時代より宿場町として栄え、人と物の往来を支える要の地として発展してきました。先人たちが築き上げたこの歴史と、町を愛する人々の英知によって培われた豊かな基盤を、私たちは未来へと引き継いでいかなければなりません。

一方で、全国的に少子高齢化が進み、人口減少の時代を迎える中でも、大津町全体が力強く持続していくためには、時代の変化を受け止めながら、地域の経済や人の営みを安定的に循環させていくことが求められます。

町には、世代や職業、暮らし方や考え方の違いを持つ、多様な人々が共に暮らしています。それぞれの思いや立場を尊重しながら、町に根づく力や資源をどう生かし、どのような未来を描いていくのか—その選択と創意の積み重ねこそが、持続可能なまちづくりの礎となります。一人一人の幸せを大切にしながら、町全体としての持続性を守る—その両立を目指し、対話と工夫を重ねていく姿勢こそが、これからの大津町に求められる在り方です。

歴史の中で育まれてきた伝統と文化、豊かな自然、潤いある水環境、そして人と人との助け合いの精神は、今も町の誇りとして息づいています。これらの地域資源を大切にしながら、変化の時代にあっても、先人の歩みを礎に、町民と行政がそれぞれの立場で力を発揮し、協働して新しい価値を創り出す姿勢で、誰もが安心して幸せを実感しながら暮らし続けられるまちを実現するため、次の将来ビジョンを掲げます。

全国的に少子高齢化が進行し人口減少局面へ移行する中、地域活力の維持や効率的な行財政運営を進めるなど、将来に向けて持続可能な発展を遂げていくためには、今後のまちづくりにおいて、量的拡大志向から質的充実志向への転換を一層本格的なものとしていかななくてはなりません。

このような中で、経済再生と財政健全化を同時に実現していくとして、経済の好循環の拡大、潜在的な成長力の強化に向けて、地域の再生・振興に向けた取り組みが進められています。

大津町においても、先人たちの努力と英知により発展を続け、育まれてきた多くの伝統と文化を活かし、美しい自然と水とまちが共存する、真に豊かさを実感できるまちを創造するため、次の将来ビジョンを掲げます。

<大津町の将来ビジョン>

今も未来もみんなが幸せであり続けられるまち 大津

これまで、大津町は戦略的な企業誘致や産業創出、宅地開発等を着実に進め、町の発展の礎を築いてきました。今後は、半導体関連企業のさらなる集積、概ね 10 年後に見込まれる阿蘇くまもと空港アクセス鉄道の開通や中九州横断道路の整備等により、本町を取り巻く環境は一層大きく変わっていきます。これらの動きは、経済や交流、暮らしの在り方等、町の可能性を広げる一方で、生活環境の変化や地域のつながりの希薄化等、新たな課題をもたらします。このような変化を前向きな力に変え、町の歩みを持続可能な未来へと導くためには、経済の安定を基盤としながら、自然や文化、人のつながりが調和した、町としての豊かさを着実に築いていくことが求められます。

その中で、多様な町民一人一人が日々の生活で安心と誇り、そしてつながりと希望を感じ、自分らしく生きることができーその実感こそが「幸せ」であり、本町が目指していく姿の一つです。町の全ての地域で、その幸せを実感できるよう、地域の力と個性を生かしながら、発展と暮らしの調和を重ねていきます。

本計画では、「今」と「未来」を切り離すことなく、いまを生きる全ての町民の幸せを基盤とし、こどもたちをはじめとする次の世代の幸せへと確実につなげていく考え方を大切にします。

町民と行政がこのビジョンを共有し、それぞれの立場から協働してまちづくりを進めることで、町の成長と町民の幸せが調和し、その豊かさが未来へと受け継がれていくまちの実現を目指します

近年、周辺自治体への先端半導体企業進出や、阿蘇くまもと空港アクセス鉄道計画の肥後大津ルート決定、中九州横断道路の開通等の本町を取り巻く環境が大きく変化しています。これまで、これらをまちの発展の好機とすべく、戦略的な企業誘致や産業創出、宅地開発等の取組を戦略的に進めてきたことにより、本町の町内総生産額の安定や町民所得の上昇が実現されました。

一方で、本計画期間においては、本町を取り巻く社会情勢のさらなる変化も想定される中で、真の豊かさを実現していかなければなりません。その中では、多様かつ複雑に絡み合った課題に向き合わなければならない難しい局面を迎えることも想定されます。そうした局面を乗り越え、真の豊かさを実現するためには、経済的な発展を追求するだけでなく、その基盤となる町民一人一人の「幸せ」も重視した取組を進めることにより、町民と行政が最大限の力を発揮し、一丸となってまちづくりを進めていかなければなりません。

そのため、本計画においては、「今」と「未来」を切り離すことなく、「今」を生きる全ての町民の「幸せ」が基盤となり、子供たちも含めて「未来」のまちづくりの中核となる全ての世代の「幸せ」へとつながるとの考え方の下、いつの時代も本町に住む誰もが「幸せ」を実感しながら暮らすことができるまちを目指すという強い決意を含め、「今も未来も幸せであり続けられるまち」という将来ビジョンを掲げます。町民と行政が本ビジョンを共有し、真の豊かさが実現されたまちの実現に向けてまちづくりの取組を進めていきます。

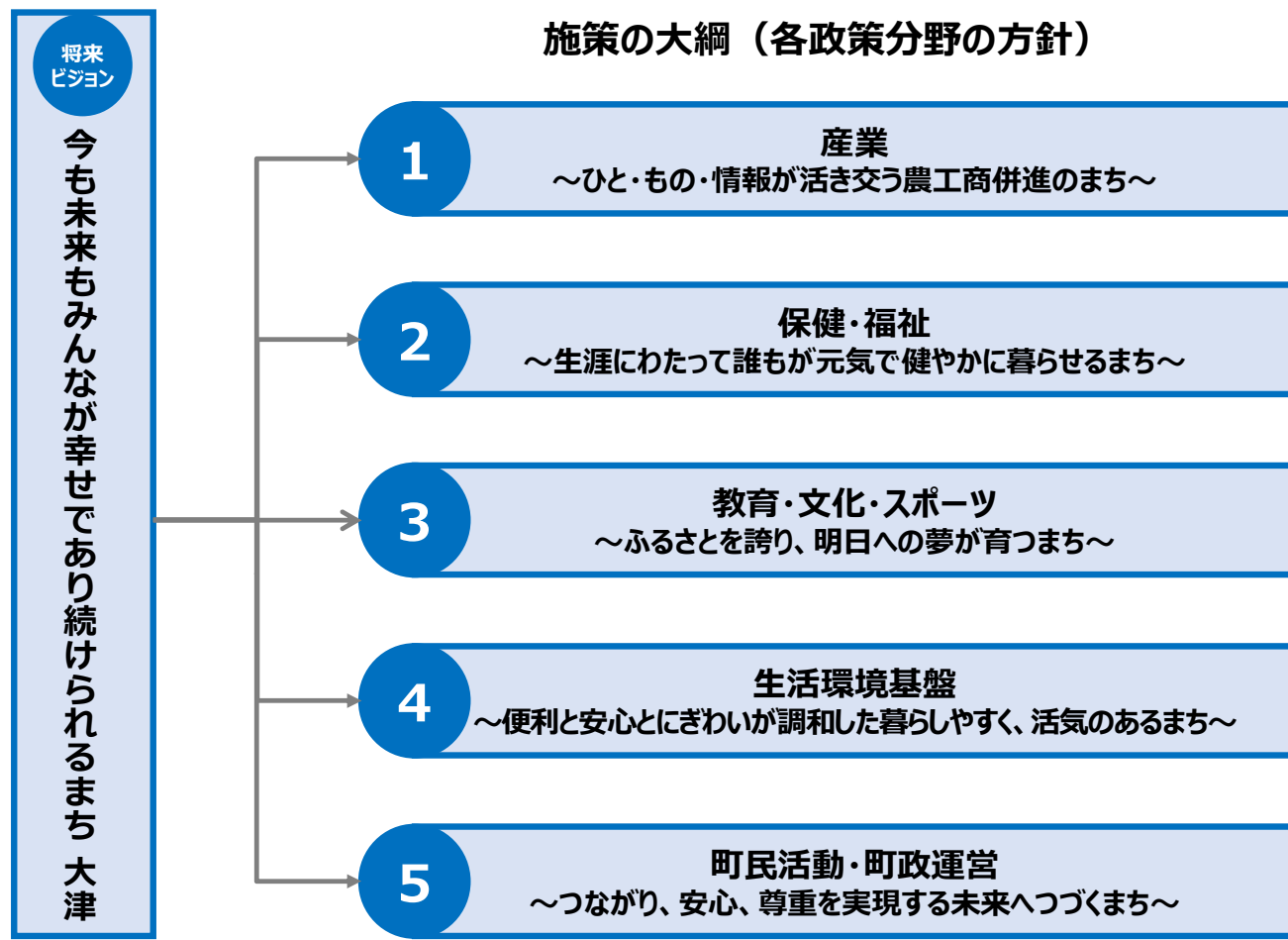
第2章 施策の大綱（政策分野別方針）

1. 施策の大綱の体系

本章では、大津町の将来ビジョンの実現に向けた各政策分野の基本方針を、施策の大綱として示します。

本計画の施策の大綱は、大津町の施策を『産業』『保健・福祉』『教育・文化』『生活環境基盤』『町民活動・町政運営』の政策分野に大別し整理します。基本計画では、5つの政策分野について、基本計画期間の4年間を見通した施策の方針を整理します。

<施策の大綱>



2. 政策分野別基本方針

(1) 『産業』 ～ひと・もの・情報が生き交う農工商併進のまち～

中九州横断道路の開通や阿蘇くまもと空港アクセス鉄道計画など等の一本町を取り巻く環境の変化でによる交通結節点としての機能向上が期待されを契機とも、周辺地域のクロスポイントとして、ひと・もの・情報の流動性を高めるとともに、農業、工業、商業の全ての分野で産業の活性化を実現します。

具体的には、農業や林業が地域の基盤を支える重要な産業であることを踏まえ、農林業の振興と持続的な営農・営林に取り組みます。また、くまもとサイエンスパーク推進ビジョンに位置づけられた「中間駅」、「工業団地」など等を活かしたアクセスの強みを活かした企業の誘致と集積、既存企業のさらなる発展を目指します。さらに、熊本市や阿蘇地域への玄関口として、観光客の誘客を促進し、国内外から多くの人々が訪れ・滞在できるまちを目指して、昔ながらの歴史ある宿場町として、また地の利を活かした現代の宿場町として商業や観光の振興を図ります。

(2) 『保健・福祉』 ～生涯にわたって誰もが元気で健やかに暮らせるまち～

年齢、性別、国籍、生活状況、障がいの有無に関わらず、誰もが尊厳や生きがいを持って健やかに暮らせるまちを目指しとするため、誰もが多様性を尊重しながら、町民同士が互いに理解し支え合う地域共生社会の実現に向けを目指し、福祉のまちづくりに取り組みます。

具体的には、子育て支援では安心して出産・子育てができるような環境整備及び支援施策の充実、更さらにやこどもの権利の擁護を推進します。また、高齢者については、が生きがいを持って、地域社会の一員として活躍できる環境づくりを進めます。またさらに、障がい害のある人が地域社会の中で自分らしく暮らせるよう支援の充実を図ります。さらに、様々な理由で日常生活に支援が必要な人や、多くの課題を抱える人が地域で生活を継続できるように地域福祉の推進に取り組みます。これらの取組を基盤として、健康づくり、感染症対策、病気の予防、や医療機関との連携や他機関協働を進め、関係機関との連携を強化し拡充を進めます。生涯にわたって切れ目のない取組を行うことにより、町民がいつまでも“健康”で“安心して”暮らせる地域を実現します。

(3) 『教育・文化・スポーツ』 ～ふるさとを誇り、明日への夢が育つまちふるさとを愛し、未来に夢が膨らむまち

～

「夢を持ち、夢を育み、夢を叶える教育」実践のもと、確かな学力、豊かな心、健やかな体を育み、たくましく未来を切り拓くこども子どもを育てます。障がい害の有無に関わらず可能な限り共に学び合えるインクルーシブ教育システムの構築を推進するとともに、外国にルーツを持つこども子どもへの日本語教育を通して、全てのこども子どもたちの多文化共生の理解促進に取り組みます。また、老朽校舎の改築や体育館への空調設置等、教育環境の改善を推進します。

地域の歴史や文化を身近に学び、次代へと受け継いでいくために、図書館、公民館、歴史文化伝承館等を活かした学習環境の充実に努めます。あわせて、全ての世代が学びを通じて心豊かに生きることができるよう、生涯学習の機会と環境の整備に取り組みます。

「スポーツのまち・大津」として、スポーツに親しめる環境づくりを推進するとともに、まちづくり、国際交流、[関係団体観光部門](#)等と連携した[取り組み](#)も進めます。

(4)『生活環境基盤』～便利と安心とにぎわいが調和した暮らしやすく、活気のあるまち～

町民の暮らしを守り、より快適にするため、便利で安心できる生活環境を整えていきます。上下水道や生活道路といったインフラの老朽化が進む中でも、計画的な整備や長寿命化を図り、有効かつ戦略的に活用することで、日常生活を支える都市基盤を整備します。さらに、地震や豪雨、火災[など等](#)の自然災害から町民の生命と財産を守るため、危機管理体制や消防・救急体制の強化、地域防災力の向上に取り組み、安心して暮らせるまちを目指します。

人と自然と産業が調和したまちを実現するため、水や緑[など等](#)の本町の豊かな自然環境を大切にしながら、公共交通体系の充実や都市拠点の整備を進め、自然と共生したコンパクトで持続[化](#)可能な都市を構築します。

また、将来的に中九州横断道路や阿蘇くまもと空港アクセス鉄道が開通することで、交通の利便性が高まり、本町のにぎわいや人の流れが[更さら](#)に活性化します。こうした動きを活かし、にぎわいの創出につなげるため、「肥後大津駅周辺まちづくり基本計画」に基づき、町の中心拠点の利便性向上や機能強化を進めます。

(5)『町民活動・町政運営』～つながり、安心、尊重を実現する未来へつづくまち～

大津町では、担い手不足や少子高齢化の進行、急激な社会構造の変化[など等](#)により、地域経済やコミュニティの活力低下が懸念される中で、持続可能なまちづくりが求められており、「大津町まちづくり基本条例」に基づき、町民と行政が一体となり、協働して取組を進めることが必要です。

まず、外国人住民の増加[など等](#)に伴う行政ニーズの多様化を踏まえ、女性の社会参加をはじめ、年齢、性別、国籍、生活状況、障がいの有無に関わらず、[全てすべての](#)町民に行政の取組を周知し、町民の声を行政施策に反映することが必要です。その上で、シティプロモーションによるまちの魅力や価値の発信、行政と町民との双方向の情報共有、そして町民が地域活動に積極的に参加できる環境整備に取り組み、地域の一体感を高めながら、生活の質の向上をめざします。

次に、町民と行政の協働を支える基盤として、地域、学校、家庭及び職場[など等](#)が連携し、[全てすべての](#)町民がお互いに尊重される社会を実現するため、人権啓発活動の充実に取り組み、誰もが安心して暮らせる活力あるまちを目指します。また、持続可能な財政の実現が必要不可欠であり、少子高齢化の進行や世界的な半導体関連企業の進出等による急激な社会構造の変化、公共施設の老朽化に伴う更新・維持コストの増大等の多様で複雑な課題に対応することができるよう、未来を見据えた計画的な行政運営を進めます。

第 3 期大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略

第 1 章 第 3 期大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略の概要

1. 大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略の目的

周辺自治体への先端半導体企業の進出やそれに伴う大津町への関連企業の進出、阿蘇くまもと空港アクセス鉄道計画の肥後大津ルート決定等の町を取り巻く情勢の変化により当面は人口の増加傾向が続くことが見込まれる一方で、令和 27 年度（2045 年度）以降は現状傾向に転換することも見込まれています。そうした中で、まち・ひと・しごと創生に向けた取り組みを強力に推進することによって、令和 27 年度（2045 年度）以降の人口減少のペースを緩和するとともに、人口減少が進行する中においても、いつまでも住み続けることのできる大津町を実現し、未来へと引き継いでいかなければなりません。

そのため、これまでの「第 1 期大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略」及び「第 2 期大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づく取組の検証も踏まえつつ、「第 3 期大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略」として、町民一人一人が夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができるまちの実現、まちの未来を担う個性豊かで多様なひとの確保、魅力ある多様なしごとの創出の 3 つの考え方の下、今後大津町が目指すべき目標と具体的な施策の方向性を分野横断的に提示します。

2. 大津町まち・ひと・しごと総合戦略の期間

国の総合戦略を踏まえるとともに、大津町振興総合計画との整合を図るため、令和 8 年度（2026 年度）から令和 11 年度（2029 年度）までを大津町まち・ひと・しごと総合戦略の期間とし、まち・ひと・しごと創生の取組を推進します。

3. 第 7 期大津町振興総合計画との関係

まち・ひと・しごと創生総合戦略は、分野横断的な取組が多く、総合計画に位置付けられる長期スパンでのまちづくりと共通する考え方を有している特徴があります。そこで、国の方針を踏まえ、町民にとって分かりやすく、より明確な進行管理を実現するとともに、両者の策定や成果検証にかかる事務の効率化を実現することで効果的な取組の推進に注力することも目的として、第 7 期大津町振興総合計画に統合し、一体的に取組を推進することとします。

4. 第 3 期大津町まち・ひと・しごと総合戦略のビジョン

「第 7 次大津町振興総合計画」において大津町の将来ビジョンとして掲げられる「今も未来もみんなが幸せであり続けられるまち 大津」は、町民 1 人 1 人が夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができるまちの実現、まちの未来を担う個性豊かで多様なひとの確保、魅力ある多様なしごとの創出の 3 つの観点からも目指すべき将来ビジョンです。そのため、「第 3 期大津町まち・ひと・しごと創生総合戦略」でも、「今も未来もみんなが幸せであり続けられるまち 大津」の実現に向けて、目指すべき目標と具体的な施策の方向性を分野横断的に提示し、取組を推進します。

第2章 取組の方向性

「第3期大津町まち・ひと・しごと総合戦略」では、町民1人1人が夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができるまちの実現、まちの未来を担う個性豊かで多様なひとの確保、魅力ある多様なしごとの創出の3つの観点を踏まえて、以下の5つの基本目標を掲げた上で、基本目標ごとの数値目標を設定し、効果的な施策の推進を図ります。

基本目標ごとの具体的な施策は、「第7次大津町振興総合計画」の基本施策に包含されていることから、各基本目標と基本施策との関連性は、●ページにおいて整理して掲載した上で、「第7次大津町振興総合計画」における目標指標のうち、特に基本目標と関連が深いと考えられるものを数値目標として設定することとします。

基本目標1 「おおづ」で働くを支える

大津町に住み続け、豊かな生活を実現するためには、働く環境の充実が必要不可欠です。そのため、多様な企業の誘致の推進等を始めとして農業、工業、商業の全ての分野における産業の活性化を実現し、全ての人がそれぞれの希望を実現し能力を発揮することのできる多様な雇用環境を整備することで、誰もが安定した雇用と魅力的なキャリアを実現し、安心してやりがいを持ちながら働き続けられるまちを目指します。

数値目標	令和4年度(2022年度)～令和7年度(2025年度)	令和8年度(2026年度)～令和11年度(2029年度)
企業新規・増設立地協定数(累計)	21件	21件

基本目標2 「おおづ」での結婚・出産・子育てを叶える

地域の活力の源泉は「人」であり、その基盤となる結婚・出産・子育てに対する支援に取り組む必要があります。若者や子育て世帯への支援の充実や地域全体で子どもを育てる環境づくりにより、結婚の希望を叶えるとともに、希望するこどもの数を希望どおり産み育てることのできるまちを実現します。また、学校・家庭・地域が一体となって、こどもの教育環境の充実に努め、地域の未来を担うこどもたちが夢や可能性をのびのびと伸ばすことのできるまちを目指します。

数値目標	令和6年度(2024年度)	令和11年度(2029年度)
「児童福祉・子育て支援の充実」に対する満足度	58.3ポイント	71.0ポイント

基本目標 3 「おおづ」を住みやすいまちにする

大津町が住みやすいまちとなるためには、安心して豊かな生活を実現することが必要不可欠です。まずは、住みやすさの基盤として、災害の頻発化・激甚化や地域の高齢化の進展、住民ニーズの多様化等を踏まえて、いつまでも町内の希望する地域で誰もが安心・安全に暮らすことのできるまちを実現しなければなりません。その上で、本町の魅力である豊かな自然環境や文化を保全しつつ、肥後大津駅周辺のまちづくりや空港アクセス鉄道中間駅周辺の新たなエリア開発や町中心部と各地域を繋ぐ交通体系の整備等を進めることにより、調和のとれたまちの発展を実現し、いつまでも豊かに暮らすことのできるまちを目指します。

数値目標	令和 6 年度（2024 年度）	令和 11 年度（2029 年度）
買い物に不便を感じている人の割合	31.5%	28.0%
「道路網の充実」に対する満足度	36.0 ポイント	42.5 ポイント

基本目標 4 「おおづ」に新しい人のなかりを創る

将来的に本町の人口が減少局面を迎えることは避けることのできない現実として迫っていることから、新しい人のつながりを創出し、町外からも本町を応援し、本町の将来を担う個性豊かで多様な人材を増やしていく必要があります。そのため、「現代の宿場町」として、スポーツのまちやバイクのまちをはじめとした大津町の強みを活かし、より多くの人が大津町を知り、体験することができるまちを実現し、本町とのつながるきっかけを創出することで、本町との継続的かつ多様な関わり方が生まれるまちを目指します。

数値目標	令和 6 年度（2024 年度）	令和 11 年度（2029 年度）
宿泊者数	301,608 人	540,000 人
SNS 発信数/フォロワー	SNS 発信数 105 回 フォロワー数 3,037 人	SNS 発信数 120 回 フォロワー数 8,000 人

基本目標 5 「おおづ」でデジタルの力を活かす

地域の活力を維持し、生活の快適性や利便性を向上させるためには、デジタルの力を積極的に活用することが求められます。そのため、行政だけでなく、民間事業者も含めて、デジタルの力を活用した付加価値の高いサービスを創出するとともに、デジタルの力によって人の持つ能力や可能性を最大化することができるよう、幅広い取組を推進し、どの地域でも誰もが便利で快適に暮らし続けることのできるまちを目指します。

数値目標	令和 6 年度（2024 年度）	令和 11 年度（2029 年度）
行政手続きのオンライン可能件数	36 件	86 件
DX 関連セミナー受講者数	20 人	30 人